

言語を使って——言語派社会学

——橋爪研究室～人文社会群——



橋爪 大三郎 助教授

社会学はトータルな学問

「社会学」とは、そもそも何をする学問なのだろうか。これは一言でいうと、人間のいろいろな営みの相互関係を説明する学問である。一般の学問は、研究対象となる現象が政治学であれば政治だけといったように限定されているが、社会学にはそのような限定がない。なぜなら、我々が社会の中で生きているということはトータルな営みであって、法的な問題も生活に起こりうるし、経済問題とも関係してくるからである。さらに政治、宗教などいろいろなことを日常生活で体験する、そういう全体的な存在が人間である。だから法学や経済学といった独立した学問分野の、相互関係を扱う必要がでてくる。

よって社会学は、我々がふだん学んでいる自然科学とは問題の解決の方法がかなり異なっている。社会学は漢方薬に例えることができる。そ

れに対して、自然科学のように対象領域のきちんと決まった学問は、西洋医学の特効薬に例えられる。発熱した場合に解熱剤が素早く効くようにきちんとした方法論が確立されていて、目的が素早く解決される。しかし全体を直そうとするときには特効薬のようなものでは効果が薄い。漢方薬のように経験的に効き目があると解っているものをうまく組み合わせさせて使っていく方が、問題の根本的な解決に結びつく。きれいな公理的体系があり、方法論がきちんと確立されていて百発百中で解答が得られるというような学問ではない。

ではその社会学に何を組み込んで新しい体系を作り上げていくか。それは、個々の社会学者が考えることである。今回お話を伺った橋爪先生は、言語に着目され、現在言語派社会学の樹立をめざして研究をなさっている。

既存の社会学における問題点

先生が大学で社会学を始められた頃の有力な立場は、システム論とマルクス主義であった。

システム論とは、社会を一つの複雑なシステムであるとみなして社会を解析していくものである。社会は企業とか地域といったように、個々バラバラの要素で構成されている。さらに、それぞれの要素は細分化でき、最終的には、個々の人間まで、

パーソナリティシステムとして細分化される。社会の全体像を記述するためには、要素ごとに記述でき、かつその相互関係も記述できることが必要である。

だがこの場合、システムとして全ての現象を捉えきめるためには、それを見る視点がどこにあるかということが重要なポイントになる。社会を客観的に観察するためには、それが

ら離れた位置で眺める必要がある。しかし、人間はパーソナリティシステムとして社会の中で生きている。だから自分自身を社会の外側に置いて観察するということは、矛盾した行動である。

システム論を用いて社会を記述すると、確かにいろいろなことを説明できるが、人間が社会を生きているというリアリティーが落ちてしまうのだ。具体的に言うと、人間が意味を理解したりするのはなぜか、他の人間を理解できるのはなぜかといった一番根本的な社会関係の基礎の部分が明確に記述できないのである。このような当事者の視点というものを取り込むことが、システム論は非常に不得手である。

言語派社会学——中間的存在としての言語を用いて

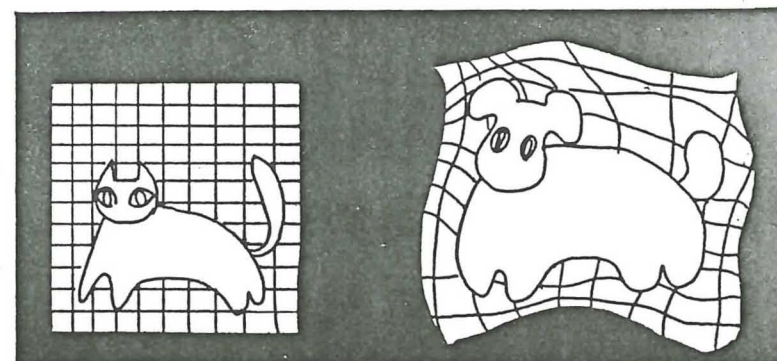
既存の社会学では、どうしても突破できない問題が残る。ならば、既存の社会学が手を付けていない領域に、社会学的な関係を説明するための新しい手法を築けないかと橋爪先生は考えられた。そこで目をつけられたのが言語である。先生が言語に着目された理由は、言語が持っている不思議な性質のためである。各人の主観的な世界、例えば感情を表すためには、自分自身にとってそれがどういう感情だったか具体的に把握できることが必要で、このときにはどうしても言語を用いなければならない。しかし他の人にも分かるから言語なのであって、他の人と共有できることが前提となっている。このため、言語は客観的なものだとも言える。すなわち言語は、主観的な性質も持つし、客観的な性質も持つということになる。

伝統的な哲学では、世界は物質世界（客観）と精神世界（主観）で出来ていて、この二つの世界には相互

これに対してマルクス主義は、イデオロギーとか上部構造を考えることによって、システム論では取り込むことが難しかった、人間が生きている意味についてもいちおううまく取り込んでいる。だがマルクス主義で一番の問題点は、この考え方が示す社会法則が、人間の社会は古代社会から資本主義を経て社会主義、共産主義へと流れるとする、歴史法則だということである。歴史の流れは人間には動かしがたいものであって、人間はその中でジタバタしても、大きな法則性は変えることはできないことを信じるのが、マルクス主義には必要である。しかし、個々の人間の生きている意味が歴史とつながらない場合は、我々の社会の成立を

うまく説明できなくなる。また、本当に歴史がそのような大きな流れをたどるかどうかが証明されていない。その歴史の流れを信じないとマルクス主義が始まらないのだとしたら、これは科学ではないはずである。仮にそのような歴史法則があるとしても、いろいろな考え方をもち、自由に行動する人間が集まった場合に、どういうロジックで社会に法則性が出てくるのか論証できていない。それに、唯物論の立場に立ち、物質現象しかない主張していながら、イデオロギーや観念といったものの存在を認めていることも矛盾を含んでいる。

関係がない、という前提で社会を捉えてきた。だが現象として関係があるのは当たり前のはずである。そして、この二つを結びつけるのが、中間的存在としての言語と考えられる。動物の人間関係と人間関係が違ふのは、言語やその他の記号を使って抽象的な関係をつくりだすことで、会ったこともない人との間にもいろいろな社会関係が生じてくるという点だ。人間社会は言語と非常に深いつながりがある。とすると、ここに二通りの考え方が可能である。一つは、何



か他の前提から、言語がこのような社会現象として成立したと説明することである。一方、そのように帰納的に説明できなければ、言語を使っていることを前提として、そこから

演繹的に考えていけば社会を記述できるはずだ、という考え方も成り立つ。この後者の立場が、橋爪先生の考えられた言語派社会学なのだ。

記号空間論—言語と性と権力と

言語を公理として取り込むと、いちおう全ての社会現象をカバーできそうだが、それだけでは完全とは言えない。そこで先生は、言語以外に「性(セックス)」と「権力」を独立なものとして付け加えることにより、言語派の一つの具体的な理論化の試みとして、記号空間論を組み立てようとしてされている。

言語は、形式(フォルム)を介在させているという点で、間接的な人間関係を表している。音声はそれ自体空気の振動であって、自然現象の一つでしかない。だが、フォルムであるからこそ文字に変換することができ、時間や空間を越えて他の人に伝達できる。そうして、宗教とか法律といった新しい社会関係ができあがってくると言える。

それ以外に、人間と人間が直接関係を持つ場合が考えられる。これはセックスの関係と言える。身体である人間は、他の身体から生まれてくるという形でしか存在し得ない。このような関係は、母と子の関係であり、社会関係としてみると家族になる。ここから結婚という関係も派生する。このような意味での性関係一

般も生じてくる。また人間には猥褻感というものがある。これは動物にはないことなので、性(セックス)が社会的な現象であるという一つの根拠になる。さらに人間には社会的な性別というものがある。このように、性は社会をつくる重要な原理の一つだと言える。

言語と性は、フォルムを介するかどうかの二者択一で、互いに独立した原理である。しかしあらゆる現象を言語化しようとしても、最後に残ってしまうものがある。その部分は言語よりもさらに間接的なもので、言語で捉えることはできない。それはいわば想像力に起因する人間関係で、これを「権力」という。つまり、現実には起こっていないが、「こうなるといけないから、このように行動せざるを得ない」ということが権力なのだ。だから、想像力の乏しい小さな子供などには権力はあまり働かない。また人々が、死後のことを考えることから形成される宗教も、一つの権力と言える。

記号空間論の着目が正しければ、社会の変遷の仕方と、言語、性、権力それぞれの変遷の仕方とは、お互いに関係があるはずである。例えば貨幣は、言語と権力の特別な組合せと考えることが出来るだろう。貨幣を介在して、マーケットといった人間関係が生じるのである。橋爪先生は、今後この理論の応用として、日本の社会の歴史的な成立ちを考えていられる予定だとおっしゃった。

日本という国は、従来分かりにくく、記述しにくい国だと言われてきた。なぜそのように言われるかというと、今まであった社会学の用語はヨーロッパ人が使ってきたもので、ヨーロッパの社会をうまく記述できるように作られていたためである。それだから、文化的に脈絡の違う世界に持っていくとうまく記述できない。例えば、人格とか自由といった言葉でアフリカの原始的な社会を記述しようとするとうまく記述できない。それよりも、現地の住民の言語を用いた方が、うまく説明できるはずである。

どのような社会でも記述できる枠組みをつくるのが社会学の役割だとするならば、社会を説明するのに

用いる言葉をかなり抽象化する必要がある。しかしヨーロッパではあまり高い抽象性がなかったもので、ヨーロッパ以外の社会を記述するのに適当な言葉は創られなかった。だから、例えば言語とか性とか権力などという、抽象性が高くて、日本もヨーロッパもうまく記述できる言葉で新しい理論を組み立てる必要がある。そして、ヨーロッパの社会を説明する場合や日本の社会を説明する場合には、それぞれもう少し具体的な言葉を使って説明すればよいだろう。このようにすることで、二つの社会に関係がつけば、両方の社会が比較できたことになるのだ。

このようにして日本を記述するためには、仏教に着目すればよいと先

生は考えられた。仏教はインドからシルクロードを通して中国や東南アジア、日本へ伝わってきた、民族にとらわれないものである。しかし、それぞれの社会ごとに形を変えてゆき、日本にくと日本独特の仏教になった。本来普遍的であるはずのものが、日本に入ってくることで変形してしまったのだ。これは仏教だけでなく、儒教に関しても同じ様なことが言えるはずだ。中国におけるオリジナルなものにどのような力が加わってこうなってしまったのかを解明すれば、日本が仏教や儒教が入って来る前から持っていた独自の前提というものが明らかになるはずである。

東工大で人文社会学を学ぶ意義について

東工大はまぎれもない理系の大学である。そのため人文社会関係の科目を軽視する学生もいる。そこで橋爪先生にその事を言ってみると、「うーん、そうですか。それは当然です。今までの社会科学は面白くないから。決まりきった学問として勉強したらあまり面白くない。そうではなくて、自分の日常と関係があるということがわかれば、何だって面白いですよ。」という答えが返ってきた。自然科学の難しさは、二階微分方程式が解けないとニュートンの運動方程式が理解できないように、入口にある程度の高さがあることである。それに対して社会科学の難しさ

は、扱う問題があまりに身近にあるため、気が付きにくいことである。だからちよとしたコツでわかるようになるはずだし、わかるようになれば、社会学がより面白くなるはずであるとも先生はおっしゃられた。

また私たちがこの理系の大学で社会科学を学ぶことの意義について、先生は、2つのレベルで答えてくださった。1つは理系の人間といえども、日本の企業文化とか、現代の資本主義文化といった現実の社会で生きている。そこにはいろいろな人間関係がある。だから、理系の人間という自己限定があっても、人文社会学についても最低限のことを踏まえ

ておく方がよいとのことである。もう一つは、専門を離れて普通の人間になった時に、理系のことしかやっていなければ、好きなことをやれと言われても、何をやって良いのか全然わからなくなってしまいかもしれない。そういう意味で欠落した部分を作らない方が良いはずである。

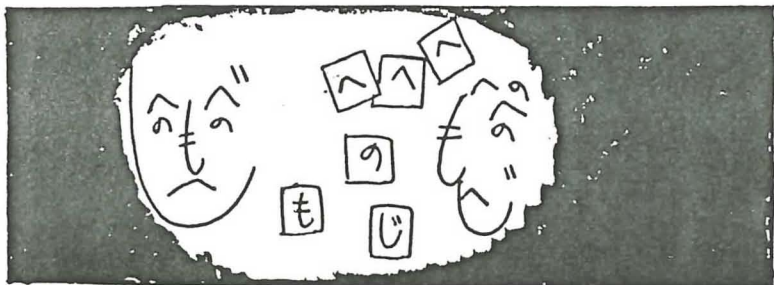
「嫌だったら、やらなくてもいいんだよ。だけどアンテナを延ばしておくだけでもいい。入口をかじるだけでもいいから、そういうものを掴んでおけば、将来それが自分の主義主張になるかもしれないし、文系の人たちとも友達になれて共通な話題も出来るだろう。」

最後に橋爪先生は職業的な専門家に期待をかけているとおっしゃった。例えば職業として自然科学者である間は、日本人であるということ意識しないで世界共通のフォーマットの上で仕事をしているはずである。政治家やジャーナリスト、外交官、

軍人など職能を持った人たちが、自分達は世界共通のフォーマットで世界につながっている、という自覚をもって自分の持ち場を守れば、一般の人にも世界全体がのまに見えてくる。そうして社会像が見えてくると、一般の日本人が、外国人に

日本のことをきちんと説明できるようになり、もっと世界の中でうまくやっていけるようになるだろうと先生は考えておられる。

(片山)





＜今週のスピーカー＞
橋爪 大三郎氏

はしづめ・だいさぶろう 1948年鎌倉市生まれ。東京工業大学助教授。77年東京大学大学院博士課程修了。＜言語＞派社会学の樹立をめざす一方、日本の知的言論をめぐって積極的に発言している。

——一八〇年代は、めづるから旧作では「ボストモダン」という肩書が流し、父親の椅子研究者が「ボストモダンの思想家」と呼ばれたのだ。そもそもボストモダンの思想はほんなんのでしょ。棚田 一般的には、建築の外野から始まったわけにいます。あの時期からトーンガリ屋根とかリーチ型とか、大理石をたてさん使った邸宅とかこの建物のがたさん出できて、機能性、合理性を一貫して追求して近代建築とは随分違った印象を与えた。そこには「口でいへば、そんなに簡単に」一途に知見を求めたもので、面白ければいいじゃないか、というふうな発想があった。同じく現代思想にも似たような考え方が始めている、マルクス主義とか実存主義が、あんなに社会のモラルとか人間の存続理由

八〇年代に一世を風靡したポストモダンの思想が、最近とみに色あせてきた。豊かな資本主義を享受し「違い」や「戯れ」を強調したこの思想は、かつてのマルクス主義に代わり、消費社会のスタイルにぴったりとマッチしているように見えたのに。時代の激しく揺れ動く今、多分に前近代の要素を残す日本の現実を見据えた自前の思想の確立が急がれる。

聞き手は宮川匡司記者

聞き手は宮川匡司記者

とかをまじめ一本やりに追究していたの
に對し、それはまじいんじゃないか、豊
かな現在の社会に生きる我々の感傷にび

ったりした発想で、自由にものを考えながらどうだろう、と言いつ出した。それがボストモダンの思想だったと思うんです。



西欧が到達したポストモダン
日本のそれとほとんど無関係

——基本的にはフランスではやった思想を土台としているとされますが。

樞爪 フランスの現代思想、つまりポスト構造主義をわかりやすくしゃべったのが日本のポストモダンと考へていい。マルス主義にたわらず、今の資本主義でいいじゃないか、という考えを前提にしていい。かつての言論のリーダーは、マルス主義に根柢があった戦後の進歩的知識人、たが、それは全く違った。若い研究者や評論が担い手になりました。そこが豊かな消費社会で育てきた若い人の感性にフィットした……。

「『明るい豊かな未来』を築く

ためにひたす「眞探求の道」に励んでみたり、企業社主のモラルに自己を同一化させて「奮励努力」してみたり、あるいは「また『革命の正義』とやに『目覚めて』『盲点』を指摘する大衆をせめてみたりする大衆は、シラケルにやつてそなたは、既成の文脈の中から身を引く懸念し、一度すべを相対化してみようがすつていい」。

これは一九八八年に出版された浅田彰の『構造力』（勁草書房）の二節「浅田をはじめ近代

新一、栗本慎一郎などがボストンダンの旗手とされ、難しめの翻訳書を手にしたおしやれな若者らが街にあふれた。「欲望」(一冊)「差異」の強調が日本的な「新進」の努力なんだと思ふ。

橋爪 ほっと関係ないですね。例えは今でこそ世界でトップクラスの日本の自動車だって、最初はノックダウン生産だった。つまり部品は全部外国から輸入して組み立てて、完成品にして、日本国内で走らせて喜んだ。次によっとパテント生産を始めた。外国から特許を買ってきて、パーツを徐々に日本で調達してつくってきた。でも肝心のノウハウは依然外国にある。その次によりよ日本独自のものをこつてくるようになった。しかし、工業はそれよかったが、知の生産は大変な。自動車は約一世紀前に発明されたものですが、知識の伝統は古

——ポストモダンとは、二者択一を迫られる単純な問題についてはあまり話してくれませんか。

橋爪 ドロクさい問題というのが苦手なんです。ポストモダンの人の書くものはシャープです。ところがあるといつに返ると、例えば選挙になれば自民党と社会党となんとか覚めない。ポストモダン党なんかどこにもないです。自衛隊の派遣とか九十億の支援問題も、やるべきかやらないべきか、どっちか選



日常
モダ

のドロくさい問題は苦手ニストの方がまだ役立つ

つて米國が考へる役間になつた。日本は士農工商の町人の部分をやつていればよくなくない。これは「本當の一知」にとつては巨大な欠落だったんです。

—— 普通の人の日常生活の大事な部分をカバーするものゝ旨い方はしてくない。

橋爪　まだモタニストの方がドロくさい問題では役に立つてゐる。いじめ問題が起つたときには、いじめちゃいけないとか、日教組のは言つてくれる

前近代が同居する日本、自前の思想が必要に

色あせたポストモダン思想

豊かな社会の足元が揺れ始めると、こうした現実の面白い、タネ明かしをする思想への滴ち足りない気持ち募ってくる。

日常のドロくさい問題は苦手
モダニストの方がまだ役立つ



——ポストモダンとは、二者択一を追はれる単純な問題についてはあまり話してくれませんか。

って米国が考える役割になった。日本は士農工商の町人の部分をやっていけばよくなった。これは、本当の「知」にとっ

橋戸、ドロくさい問題というのが善事
 なんです。ポストモダンの人の書くも
 のはチャブですとい。ところがふと固
 態になると、例えば選挙になれば自民
 と社説をちゃんと覚しがない。ポスト
 モダン覚ふかどこにもないんです。自
 衛隊の派遣とか九十億の支援問題も
 やるべきかやらざるべきか、どっちか選
 ばなければならないときだつてある。ど
 うしたらいひんだろうと考へてしまふ。
 その点、八〇年代にはやつた江戸ブー
 ムというのは象徴的なんです。江戸時代
 の消費は町人が担ひ、武士は消費なんか
 してはいけなかつた。彼らは武力、軍事
 とか別の担うべきものがあつた。そうい
 う棲分分けをしたのですが、戦後六〇年
 代以降の日本は、ある意味で全部江戸の
 町人社会になつてしまつたといえる。
 つまの政治、軍事、外交は考えず、代わ

ては巨大な穴落つたんです。

——普通の人の日常生活の大事な部分をカバーするようなものの言い方はしてくれない。

橋爪 まだモタニストの方が、口くさい問題では役に立つことがある。いじめ問題が起つたときには、いじめちゃいけないと、教組の人は言つてくれるわけですが、役に立つかどうかは別にしても、どこがポストモダンの人の言い方はやとこして、お屁芝居にはちよつとかわらない。だからモタニストだってまだ道具をもちえて登場してゐる場面があるだろう。自民党の金丸さんなんか、何か考へてゐるような感ずるでしょう。学問や思想はそういう人たちの知恵や知識と本当は渡り合つていかないといけない。

——アガデミズの人々もなかなか大變なことになつてきた。

最新刊の「現代思想はま何を考えればよいのか」(勁草書房)は、
求むる戦時時代の時代認識を背景に、日本の言論が世界に通用しないに
原因を明快に説き及ぶ。倫理、法律、国家制度、教育、経済、伝統
といった普通の市民が生活していく上で、解決を要する問題から着
手むけてきたこれまでの現代思想を批判し、外国へ迫っていく「モヤッ

「チ・アッソ」の思想からの転換を主張する。「論」としての社会科学（毎日新聞社）はマルクス主義と日本国憲法の検討を通じて、アクチユルな社会科学の必要性を説く。このほか「はじめの構想と義」（講談社現代新門）や「伝致の『説戦略』（勁草書房）」などがある。

でしかも新鋭の図式を与えてくれた。例えば、新しいファッションを求め、次々と「違い」を見つけて出す行動様式を「自己差別化」という言葉で説明した。しかし、戦争が始まり、

が教える歴史ではわからない。そのために方法が必要なら方法を考へる。外国にあるならば、それを使い、見つからなければ自分でつくればいいのです。

ほん

1991-53/16

1991-7
4/16

「ASCENT」第17巻4号(1991年5月号) pp. 26-29 駿台文庫

問題点を解明する社会科学の役割は医療に似ている
「高校に合格する……これが僕らの目標だ。それは、その高校に、一体何を求めているのか? 自分が目標として、入る大学には、どんな先生がいるのか? そこにどんなことが研究されているのか? 知るデータは僕らの回りにあまりにも少ない。興味がある学科があっても、それにふさわしい先生がどの大学にいるのか、わからないという人もいるのではなかろうか。このコーナーでは、いろいろな分野で斬新な、また意欲的な研究をしている先生とその研究に注目し、紹介していく。」

今年度の第1回は、東京工業大学で社会学を教える橋爪大三郎先生をお呼びした。橋爪先生は、専門の言語学派社会学の樹立を目指す一方、広く一般に向けて政治、経済、社会、国際関係などについて積極的に発言されている。

まず社会学とは何か、また社会学を学ぶことの意義は何かということからお尋ねしてみよう。

「社会学と自然科学の最大の違いは、社会学は研究することによって対象が変わってしまうということです。自然科学が物質的現象を研究してもその物質自体が変わることはないわけです。パイプをいくら研究してもパイプの行動パターンは変わらないわけですね。」

社会学は今、現在を生活している人たちの社会のメカニズムを研究する学問だ。常に変化してゆく世界を見渡すために何を、どう判断をしていくのか? この問題に現代思想の分野からアプローチする。

東京工業大学助教授

大学の最前線から front Interview

神谷真梨子・文
text by Mariko Kamiya
外山ひとみ・写真
photographs by Hitomi Toyama

橋爪大三郎

ンが変わるわけがありません。だけど社会学でいうのは研究することによって変わっちゃうんです。例えば、経済のことを研究して経済のメカニズムのことが悪くなって分かれれば、そうならないように変えていくことができちゃう。政治も、文化も、宗教、教育もそうです。(自然科学で一番似ているのは医学でしょうね。医学を研究すると病気が分かっちゃう。健康になるでしょう。困っている人が助かるでしょう。社会学も同じなんです。社会でいうのは、いつも問題を抱えて困っているんです。だから研究するんです。研究したら、社会がこうなっていくっていうのが分かる。その結果、みんながそれを納得すれば社会は変わっていくんです。そこが根本的に自然科学と違うんです。自然科学は永遠不変の法則を求めますが、社会には不変の法則はない。変わるんですから法則ではない。規則とか、慣習なんです。

それから、社会学を学ぶ、動機って言うのは知的好奇心もあることながら、他の人間に対する関心、自分たちの社会や、他の社会、他の文化、地球上に我々がたまたま生活しているという自分を含めたトータルなこの世界に対する関心というのがある。動機になるわけです。そういうことに関心がある人に社会学は向いていますね。自分の世界が狭すぎる人

「現代思想はいま何を
考えればよいのか」を追究する。

PROFILE

はしづめ・だいさぶろう 1948年神奈川県鎌倉市生まれ。77年東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。構造主義を踏まえた「言語学派社会学」の樹立を目指す執筆活動を経る。89年より東京工業大学助教授。専攻は社会学。主な著書に「現代思想はいま何を考えればよいのか」(勁草書房)「冒険としての社会科学」(毎日新聞社)「はじめての構造主義」(講談社現代新書)など多数。



1991-7 6/16



クロード・レヴィ=ストロース

「構造主義」という言葉を聞いたことはあるか？構造主義とは一体何なのか知っているか？

私が人に勧められて橋爪大三郎さん著、「はじめの構造主義」という本を読んでいると、友人たちは口を揃えて「レポートの課題なのか」と不思議そうに聞いた。

「これが今の大学生の現状である」

私は安易に、その本を書いた本人にお話を伺いたく、橋爪さんを訪ねた。

「構造主義とは何なのか？」

「何故そのことを知る必要があるんですか？別に知らなくてもいいんじゃないですか？」

橋爪さんは、まるで謎か

けでもするように、にっこりとほえんだ。

「何故知る必要があるのか、知る必要はあるのか」

「必要」は確かにない。しかし「不必要」もまた、ないはずである。知っていいと悪いではないか。それではないか。今どきの大学生などと言われたままでは悔しいではないか。

ということ、ここでは「構造主義」とは何なのかを知るべくお話を伺うことにする。

現代思想特別講座

社会学者・橋爪大三郎さんに聞く

「構造主義とは何なのか」

What kind of modern thought is Structurism?

構造主義は社会学の入口

「社会学を勉強し始めたきっかけはなんですか？」
☆高校の頃進路に迷って、学校の図書館で社会学の本をいろいろ読み漁ったんです。すると「革命」とか書いてあって、世の中をどんどん良くしていくってよい学問だと気が付いたんです。そこで、これは面白そうだなということ、やることにしました。
「その時初めて社会学に興味を持たれたのですか？」
☆それまで、そんなものがあるなんて全然知りませんでした。いろんな分野の本をパラパラめくってみて面白そうなのを借りて帰ったんです。まあ、もちろんもともと社会について関心はありましたけど。
「大学でも専攻されたのですか？」

☆ええ。でも東大に行ってみたら、社会学というのはちっとも面白くないということが分かって、全然勉強する気がなくなりました。高校の時、初めに読んだ何冊かの社会学の本はまあまあ良かったんですけど、よく調べてみると外国の学者の言ったことを引き写しにしている部分が多かったりして、社会の現実をトータルで考えてみようという迫力があまり感じられないんです。また、大学の先生には正直かなり失望したというところもあります。
「どうして「構造主義」を題材として本を書かれたのですか？」
☆一つには、マルクス主義ではどうもおかしい、というところがありました。そうすると、いろいろ他の考え方も探りを入れて行く必要があったわけだけれども、それがたまたま構造主義だったんです。*レヴィ=ストロースという人自身そうだ

けれども、マルクス主義のへんてこなところをいやという程知っていて、それでいて新しい考え方を見出しているわけで、そのへんの距離の取り方というのが大変すがすがしいと思ったのです。こういう考え方もあったんだという解放感があったわけなんです。もう一つは、社会学という学問に潜り込んで行くのに、取っ掛かりというのがなかなかなかったんです。構造主義は家族とか親族とかいった現象を研究しているんです。家族、親族は社会学の基礎でしょ。だから、構造主義から入っ
橋爪大三郎
一九四八年生まれ。東京工業大学助教授。主な著書に「言語ゲームと社会理論」「ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン」(勁草書房)、「はじめての構造主義」(講談社現代新書)、「冒険としての社会科学」(毎日新聞社)などがある。

て行けば社会学の方に出来るのではないかと思いましたが、構造主義とは、社会学の入り口だったわけですから。

人間であるとはどういうことか

—構造主義とは一体どんな考え方なのでしょうか？—
☆人間であるとはどういうことか、その条件を考えるのが構造主義です。例えば、我々は、現代社会で生きて行く以外に、人間の在り方って知らないんですよ。でもそれ以外の社会だってあるはずですね。中世もそうだし古代もそうだし、いろいろ歴史的な社会がまずある。だけど構造主義は、そういう時間の上で逆上って行くんじゃないかと、民族の違いとか、未開社会とか、全然違った作り方でできて

いる社会について調べて、それをみんな「社会」としては同じ値打ちがあるんだ、と言ってるんです。どの社会でも同じように人間らしく生きられるから、同じなわけです。我々是我々の基準で、自由がないとダメだ、経済的に豊かでないダメだ、というように様々な価値観を持っています。そうすると、自分の社会が一番いいことになるかもしれない。しかし、どんな社会にもその社会なりの価値観があつてね、自分たちの社会が一番いいわけですよ。じゃあどちらの考え方が正しいのかというと、どちらとも言えない。両方とも自分の方がいいと思ってるわけだから、構造としては同じだ。自分が人間らしいと信じているところは同じなんです。そういうことはちゃんと証明できるんだ、というのが構造主義です。どうやって証明するかというと、家族や親族など基本的人間

関係の作り方は同じじゃないかとか、物を交換する、言葉を喋る、そういう基本的行動は同じじゃないかとか、そういう風に考えていくんです。
—異文化を相対化するってことですか？—
☆そうですね。そうすることによって自分の文化も深く理解できるし、それを相対化して自由になれるということですよ。マルクス主義も一つの解放の思想ですね。つまり、現代の社会はどうしようもなく、いやな部分がある。どうしていやなのか、それは資本主義だからだ。資本主義ではなくて社会主義になれば、我々は解放されるぞ、ってやったんです。構造主義もこれに似ているところがある。現在の社会は、こうじゃなきゃいけない、あじゃなきゃいけないということがある。いろいろあります。でも本当は、そうじゃなくていいんだ、もっと別な社会の在り方だ

ってあるんだ、と考えられるんです。そう考えれば、ある意味で精神は非常な解放感を得るのです。
—構造主義とは、保守的な学問に見えてしまうのですか？—
☆保守的だから悪いっていうのは、進歩的な考え方なんです。だからあなたが進歩主義者だってことだけでも。進歩主義って言うのは、我々の社会の支配思想なんです。それに引き込まれないで生きて行くって無理なんです。だから、本当の意味で、構造主義を身を持って実践するのはなかなか難しい。これは無理な思想なのです。ではどうするか。構造主義の言ってることは確かに正しい。けれど進歩主義も正しいと思ってる日々暮らしてるわけですよ。その関係はどうなっているのか。これはクエスチョンです。人間の知識がいつか完成してしまうと、これ以上完成する必要がなくなるわ

けだから、一定の状態になる。そうすると進歩しなくなるから、構造主義的になるかもしれない。でも、そんな日がいづ来るか分からないんです。完璧というのがあるなら、それが理想に決まってる。だけど、それはとてもつまらないことなんですよ。

対立点よりも共通点

—構造主義の魅力とは？—
☆構造主義は、普通の人と違うんです。こういう風に考えなきゃいけないというところが全然ない。結局どんな文化も人間の作った文化じゃないか、ということを確認するための手続きだけからできているんです。構造主義の本を読めば分かるけれど、数学みたいになっっているでしょ。これが手続きなんです。これは、ど

の文化も同じであることを証明するための手続きなわけですが、証明された内容を「構造」と言います。文化のパターン、人間の考え方のことなのです。あるところまで抽象してしまえば、人間のやっけることはみんな同じだということですよ。そして、対立点を描いておいて、共通点を見つけて行く、という学問なのです。そういう所が魅力ですね。
—最後に今日の学生にメッセージをお願いします。—
☆昔風に言うなら「いつまでもあると思うな親と金」ですか（笑）、若い頃は、時間や体力はあるけれども持っていないものを欲しいと思うんですね。そして、たくさん持っているものを、とくさん持っているものを、とくさん持たないで、将来の自分に向かつて、いま自分が沢山持っているもの（例えば時間）を投資してゆく、という積極的な努力が大切

ですね。まあ、自分だけの何かを見つけられた人は幸せです。結果はどうあれ、あまり自分に向いていないことなんかもしてみればいいんです、若いうちは。
—ありがとうございます。
※レヴィ・ストロース
フランスの人類学者。構造主義の先駆者。主な著に、一九五五年出版「悲しき熱帯」などがある。

最後に

「思想」といえば、その言葉だけを敬遠したり、嫌悪感を催す人も少なくないことだろう。そして、たいしては「そんなこと知らなくても、実際の社会生活のうえで何ら支障があるわけでもないし」などといった気の弱い弁明をつけ加

えたりする。
確かにそういった領域は、大学生にとって、それを専攻しているものや好奇心旺盛な知的大学生のスノビズムでしかなく、無知無教養化した大方の学生には無関係のように思える。しかし、何の主義にも組まないことが、また、主義となるように、人が行動している上で何らかの主義、思想が意識下で働いているのである。

このお話を聞いて、少しでも現代思想というものに興味を持った人がいてくれたら、この企画の意図は充分達げられたことになる。初めから苦手意識に妨げられずに、自分の可能性をいろいろな方向に延ばして行っている。時間は否応なく過ぎて行くのだから。
最後に、興味深いお話を下さった橋爪さんに感謝します。貴重なお時間をありがとうございました。

未来の人事戦略を探る
仕事って、何なんだろう？
オピニオン・インタビュー

第2部

仕事本来の意義は どんどん曖昧になってきた

社会学・橋爪大三郎

人間にとって「仕事」とは何なのか

——現在、仕事の意味するものが非常にあいまいになってきていると思います。「なぜ、仕事をしなければならないのか」との問いかけがある一方で、仕事と遊びの区別がつかない部分もあります。そもそも、人間にとって仕事とは何でしょうか？

橋爪 仕事の定義ですか？ それは難しいですね。あえて言えば、たとえ嫌でもやらなくちゃいけないのが仕事かな。

人間が生命を維持するために、どうしても必要な活動がある。動物だって生命を維持していますが、人間の場合それを意識的に協力してやっている。人類は、狩猟段階から農耕段階を経て、だんだん高度な段階に進んでいるわけですが、どの段階でも仕事の本質は役割分担です。自分でもやらなきゃいけないと思って、他のメンバーも期待している。そうやってお互いに支え合うところに、仕事の必然性がある。仕事がないと、社会は存続できません。

やりたいときだけやる、なんていうのは仕事じゃないので、つらい部分があるからこそ社会的にも価値があるわけ。だからこそ、達成感もある。苦しみの要素がなければ、それは単なる道楽でしょう。定義上、仕事ではない。これがまず基本です。

ところが、社会が発達すると仕事の意味も変わってきます。たとえば農業が始まると、食料が毎年ふんだんに手に入るようになる。そこで、直接畑を耕さない別な仕事に従事する人びとが出てきた。神官、政治家、軍人、

商人、焼物や織物の職人などです。つまり分業の発生ですが、その結果、互いに必要なものを交換する市場（マーケット）も生まれた。

ここで、仕事の定義が変わるのです。マーケットで売れるものをつくるのが、仕事であると。マーケットを介して、見ず知らずの人びとがお互いを支え合う。政治はマーケットで売買されたりしないが、税金を取ったりするからマーケットを前提にしている。

さらに産業革命を迎えると、仕事の性質がもう一度、大きく変化します。

それ以前の伝統的な社会では、仕事は家業として代々受け継がれるものだった。靴屋の息子は靴屋。いやおうなく与えられた職業のなかに喜びをみつけるしかなかった。そこへ産業社会が到来して、労働力市場というものが出てきたのです。つまり誰でも、自分の労働力をマーケットで自由に売ることができるようになり、職業選択の自由が生まれた。

産業社会の生産形態は、とてもパワフルで、伝統社会をどんどん喰い破って発展していった。そうすると、農村から都市へ都市へと人が集まっていく。こうなると、誰がどういふ仕事をするかは、宿命ではなくて、その人個人の適性と努力の問題ということになる。自分の能力や個性を發揮して、社会的にも認められた。そこから、仕事の達成感が得られるわけです。

でも能力といい、個性といっても漠然としたもので、それを社会的に利用可能なかたちになければならない。それが、教育です。ある職業につく前に、必要なことを前もって勉強させ、専門知識や技能を身につけ

てから就職する。こうなると、学校での勉強も束縛感があって、仕事みたいになってくる。教育は自分に対する投資。時間やエネルギーを使って自分の能力を高め、あとで賃金として回収する。人生が、一人ひとりのビジネスみたいになっていくわけです。

仕事が無名化の中で何にアイデンティティを求めるか

——そこで仕事の存在意義がどんどん個人的なものになると思うのですが、現在の最大の問題点は何なのでしょう？

橋爪 ひとつは、仕事の「無名性」でしょう。マーケットで売ってしまえば、あとにはお金しか残らないわけです。そのお金も、使えばなくなってしまう。

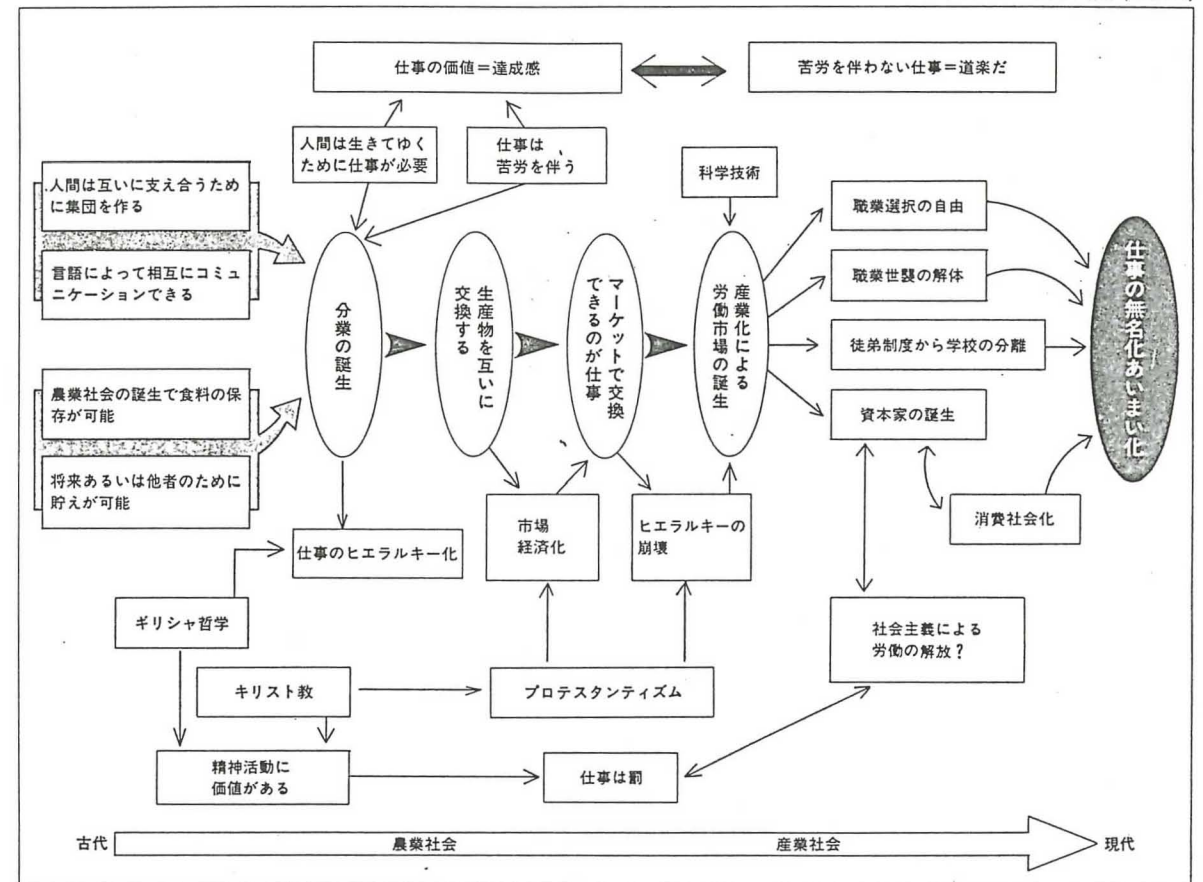
伝統社会では、親から子どもへ、技術や職場を継承していった。土地、財産、家名も継承した。その伝統の連鎖のなかで、自分の位置を確かめることができたのです。

けれども、職業選択の自由とは、親と子の仕事が無関係になるということ。一人ひとりが孤立してしまう。産業社会の仕事にもそれなりの達成感はあるものの、主要には収入を得たという満足であって、時間の流れに耐えうるものではない。収入は消費生活のなかで消え去って、そこに自分のアイデンティティを求めても虚しい。一人ひとりが置き換え可能でしかないというのが、現代社会の労働の一番つらい点です。

そこで仕事に、置き換えがたさを求める。自分がいるからこそ、この仕事がないとげられたという証拠を探し始める。それが誰にでも見つかるものなのか、どうか。

仕事観の時代変遷

※インタビューをもとに作成 (KONISHI)



職人の場合、顔見知りの範囲に自分の仕事をひとつの作品として売っていたんです。

「あの人のつくった靴は、やっぱりすごい」という具合に、知人たちに喜ばれ、一人ひとりの人生に役立っていることを実感できる。そこには単なる商業主義では得られないような喜びや誇りがある。

今日、こういう満足が一番得やすいのは、発明・発見や技術革新が伴うような専門職の分野でしょう。もうひとつはベンチャー企業を起こして成功するようなケースです。創業者にとっては、企業そのものがひとつの作品になる。どんな会社にも創業の神話があって、創業者は大きな達成感を得ているわけです。創業者に近づいていた人たちだって、右腕とか懐刀とかいわれて、ミニ神話のなか

で達成感を得られる。

それでもない場合は、何々課とか営業所みたいな一種の運命共同体みたいな場所で、仕事プラス・アルファの要素をとにかく見つける。店長が尊敬できるから頑張るとか、気の合う同僚がいるから仕事を続けるとか、企業全体からはなかなか見えない人間関係のなかに、仕事の喜びを見つけていく。

それも嫌な人は、仕事でなくて消費に達成感を見つかるしかない。人間にはみな自己顕示欲がありますから、自分の個性や存在感を浮き立たせるようなアイテムを身につければ、それなりに満足できる。あるいはアフター・ファイブの時間に打ち込めるものを見つける。それもいいですが、これでは仕事の場で自己確認できたことにならない。

結局、すべての人が仕事で世の中に知られるわけじゃないし、職場にうまいこと喜びを見つけれられるわけじゃない。だから企業としては働くことの意味を従業員にちゃんと説明する必要があります。めいめいの仕事ができるように社会につながっているか、それをきちんと語るようなストーリーを提供する。それが企業理念というものでしょう。いまの時代、企業理念をはっきり語れないような会社は、従業員にもそっぽを向けられ、やがては淘汰されるしかないのです。

●はしづめ・だいさぶろう 1948年、鎌倉生まれ。77年、東京大学大学院社会学研究科博士課程修了後、無所属で執筆活動に専念する。89年より東京工業大学助教授(社会学)。「はじめての構造主義」(講談社現代新書)、「冒険としての社会学」(毎日新聞社)、「現代思想はいま何を考えればよいのか」(勁草書房)などがある。

9/16

9/16

勁草書房

かつての流行は、一時期の「知的」好奇心の満足に過ぎなかつたように見える。その一方で、現実の世界情勢は余りにも目まぐるしい変化を遂げ、世界は激動に揺れ動いている。国際的には東欧世界の政治的激変、湾岸戦争の連におけるペレストロイカ、そしてジャバングロブリスム。思想が単なる知的遊戯でないとするならば、それは我々の生活を揺り動かせたこれらの諸問題を説明するものでなければならぬであろう。

ものである。

青木保

每 2 瓶

ない

^o

(f)

よりよき生活と平和のために

1991年4月8日

慶応義塾大学
発行：慶応義塾生活協同組合理事會
編集：院生委員會
〒108 東京都港区三田2-15-45
慶応義塾大学内
☎ 03-3455-6631

か。

すべてがあつてなく崩壊した。ク
ーデター失敗、そしてソ連共産
党の解体。テレビのニュースは次々
と倒されていくレーニン像を大写し
にし、雑誌は歓喜する人々、苦い思
いで見つめる人々のコメントを掲載
した。だが、バブル経済のさなかに
青春を謳歌しちゃったわたしたち
(くくくすみません)には、「なん
だかよくわかんない」のも確かであ
る。なにせ経済学部に入學しながら
「マル経ってナニ？」と叫んだヤツ
もいるのだ。そこで慌てて橋爪大三
郎東京工業大学助教授(社会学)の
研究室へと駆け込んで、特別講義と
あいなったのだが……

かつてサルトルが、ピカソが、そ
して小林多喜二が信じたあの思想、
それがいま、歴史の彼方に消えよう
としている。知識人を席巻したマル
クス熱とは、いったい何だったのか。
昔から、考え方としての社会主義
は存在した。王様や金持ちの存在は
許せない、みんなが平等で、食べる
ものに困らず、のんびり平和に暮ら
せたら——しかし、それはあくまで
も空想であつて、社会を動かす経済
のメカニズムを理解していなかった。
ところがマルクスは、社会の土台
には経済があり、イデオロギーや政

ソ連共産党がなくなつて、 そして20世紀の最大の夢がしぼんだ

私たちの父さんやおじいちゃんの世代があつた地上のユートピアが、
レーニンがつくつて、ゴルバチョフまでなんと持ちこたへたソビエト連邦だつた。
無惨にも解体された共産党神話つて、そもそものはじめから幻想だつたの？

治制度はその上に浮かんでいて、過
ぎなことを考え、経済について深く掘
り下げた。その成果があの有名な「資
本論」である。「資本論」の学問的
水準は時代を凌ぐ半世紀以上超えて
いたと、橋爪氏は言う。

モノが生産されるのに必要要素
は、土地、労働、資本の三つ。その
うち、モノの価値を決めるのは、労
働の量である。マルクスは唱えた。
しかし、現実の経済では地代(土地
の価格)も、利子(資本の価格)も
存在する。そこでマルクスは、地代
や利子が存在するのはおかしい、資
本家や地主の不労所得を撤廃し、土
地と資本は共同のものにすべきだと
主張した。

マルクスはまた、資本家がなぜ利
潤をあげることができるのかを検証
していく。その秘密は、労働力とい
う商品にある。資本家は労働者(な
つかしい言葉)にぎりぎり生活し
ていけるだけの賃金を払わない。
しかし、実際の労働が生み出す価値
は、賃金より大きく(剰余価値)、資
本家は余計な価値を手に入ることが
できる。つまり、搾取である。

こうして資本家は資本を蓄積して
いく。その資本で機械や工場を大き
くしていけば失業者は減る。利潤は
労働力から生み出されるから、資本
が増えれば増えるほど、労働力のウ
ェイトは減少していく。従って利潤
率は低下すると、マルクスは説いた。

ニユースが大好き●総集篇

マルクス主義

つちやのりこ●1988年、橋
本恵生まれ。新報社勤務を
へて、現在はフリーライタ
ーに。「週刊朝日」「日経ア
ントロポス」「日経流通新
聞」などにおもに文化やト
レンドについての記事を執筆
している。

儲からなくなった資本家たちはど
うするか。労働者からの搾取を強め
るか、資源と労働力を求めて外国に
侵入するしかない。というわけで帝
国主義戦争が起こるのだ。

おりしも、第一次世界大戦が勃発
し、次いで、世界は恐慌に見舞われ
ていく。マルクスは、ノストラダムス
ばりの予言者だつた、というわけで
ある。そして何より、マルクスの主
張がロシアをはじめ、中国や日本で
受け入れられていった理由は、それが
「科学的な真理」ということになつて
いたから、と橋爪氏は続ける。

マルクス主義は経済だけでなく、
歴史や文学、芸術、国際関係論にい
たるまで、世界をひとつの原理でト
ータルに説明できた。聖徳太子の昔
から、思想を輸入することに慣れ切
つていた日本人は、すべてを解決し
てくれるありがたい思想がまたひとつ
つやつてきたと思つた。

資本主義が出来かかったころの日
本は、貧乏な人が多くて、資本家
反対の叫びはアビール力があつた。
労働力も人間性も、すべてを奪われ
たあなたがたは解放されなければな
らない、という言葉が、人々を魅了
したのだ。

いいことづくめのように見えたマ
ルクス主義は、完璧で絶対の思想だ
つたために、いつの間にか現実とか
け離れたものになつていった。マル
クスは「宗教は民衆の阿片だ」との

べていたのに、当のマルクス主義が
「科学」から「宗教」に姿を変えてしま
つた。

科学とは何だろう。
古い科学観では、真理は永遠不滅
のものと考えられていた。しかし、
アインシュタインが現れてからの、
20世紀の考え方では、科学を仮説、す
なわち反証可能なものと考えた。理
論と合わない現実が現れれば、理論
を現実に合わせて修正する。

しかしマルクス主義は、理論と合
わない現実が現れても、現実の方を
理論に合わせて修正する。これが宗
教でなくてなんだろう。

このように、マルクス主義の「真
理」の前に、自分たちの現実を無視
されてしまったのが、ソ連の人々の
悲劇であつた。

共産主義と社会主義の違いは

じゃあ、地図の上から赤い色が消
えていくのですね、社会主義国家は
死んでしまふのですねと性急な質問
をしてしまい、いやちよつと待てよ、
共産主義と社会主義の違いを把握し
ていなかった、と赤面しつつ尋ねる。
共産主義は、私有財産を否定する。
社会主義はそこまで厳格ではないが、
所得格差など社会的平等等をそのま
まにしないで、政府が介入するなり
して弱者を救済し、不平等を是正し
ようという考えだ。
そうした社会主義的政策はケイン

ズ以後、資本主義国でも取り入れら
れるようになり、社会主義の専売特
許ではなくなつてしまった。日本でも
福祉政策が行き渡るにつれて、社
会主義の理想は色あせた。労働者も
学生も、もうそんなものを信じなくな
つた。

いま日本が国際社会から求められ
ているものは、日本の国際的な貢献
である。ボーダーレスといわれるよ
うに、各国が経済的につながってい
る現在、日本は国際社会のなかで強
者と見られている。冷戦の時代は終
わり、アメリカはもう日本を守つて
くれない。

それにしても、なにかがへんだ。
抱えるべき思想もなくなつて、へら
へら生きてしまつていいのかと、ふ
と真面目に考えてしまう。橋爪先生
は、マルクス主義は自分の姿を映し
出して検証する鏡であつたといつて
いますよね。その鏡はもう、壊れて
なくなつてしまつたのだと?

「僕は昔、世界観やイデオロギー
といった眼鏡をかけて世の中を見て
いたのです。気がつけば、その眼鏡
はいびつで、現実と合わなくて、錯
覚や錯覚がいつぱい見えていた。
それで外してみたところ、こんどは
ピンぼけで、何が現実なのかよくわ
からない。でももう、別の眼鏡はない
のですから、がまんをして、何とかピ
ントを合わせられるように、現実の
見方を覚えていくしかないんです」

(参考)橋爪大三郎「現代思想はいま何を考えればよいのか」(勁草書房)

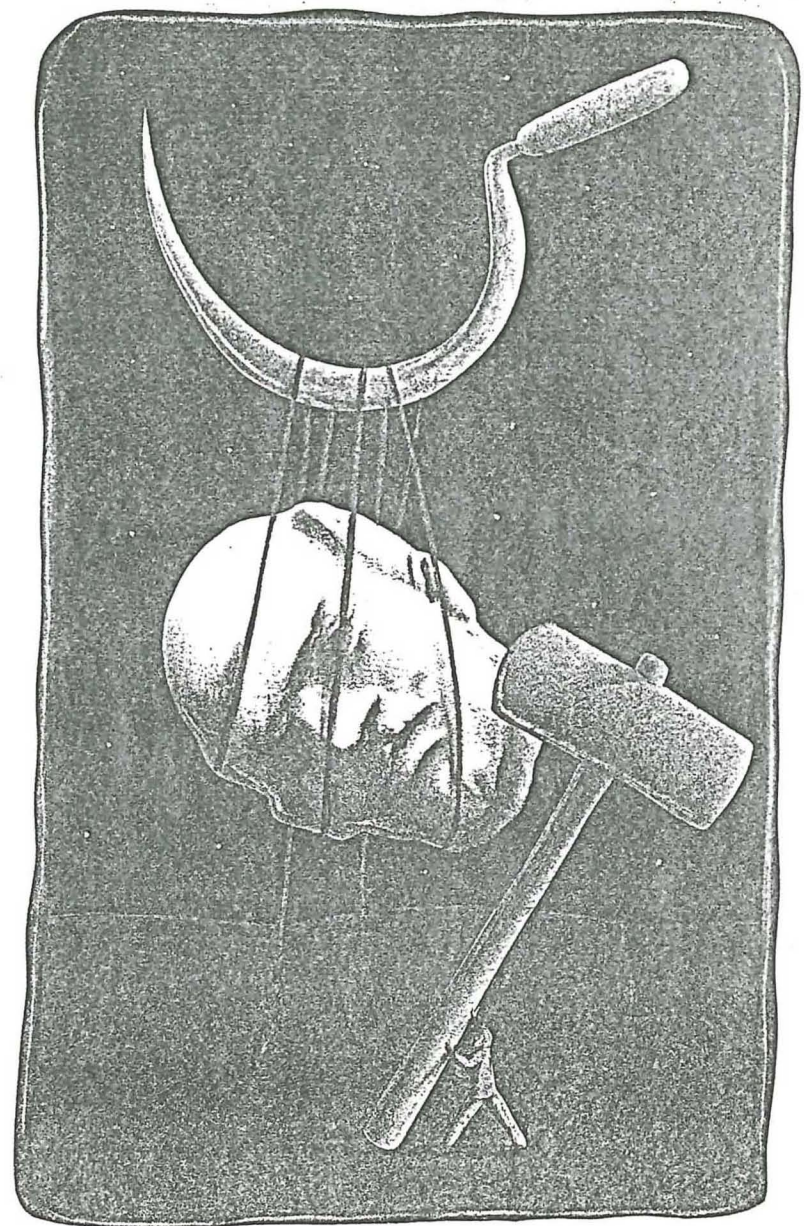
MARXISM

文:土屋典子

Text:Noriko Tsuchiya

イラストレーション:松本圭以子

Illustration:Keiko Matsumoto



○社会と性

常識的に考えれば、性は、肉体を備えた一方の個体と、肉体を備えたもう一方の個体との間の、直接的関係のことだ。性の領域は、社会の中の相対的に自立した、部分的な空間だと言える。では、性は社会にとって、どのように重要なのか？

そもそも個体を再生産しなければ社会が成り立たない。だから性は、社会を基礎づけるもののなのだ。

もつとも、ただ個体を再生産しても、それがそのまま社会を再生産したことになるわけではない。社会の構造を再生産しなければだめである。

昔だったら、元氣な男と女が結婚して子供を産んで、いろいろな知識を体得させながら養育する。そうやって、労働力や社会の構造を再生産するのが主要なやり方だった。けれど今では、技術力を高度化してゆけば、生産力は維持発展できるし、出産よりも教育が社会の再生産には必要となっている。そのため、社会の中に占める性のウエイトは相対的にどんどん小さくなってきて、ほとんど個人的

するための裏方にまわって大変な苦勞をしている、ということになる。

しかし、家族が市場から分離したままの状態が続くとは思えない。むしろ、今まで家族の中で行われるべきだと考えられてきたことをもって市場の側が担うようになるのじゃないか。

では、市場が家族の持つ機能を果たしていくにはどういう条件が必要か。ひとつには人間が一人ひとりで暮らしていても平気だというふうな物的環境が変化する。もうひとつは、子供を出産すること、が、家族のような生活単位の問題ではなくなる。この二つの条件のうちの、少なくとも片方が実現した場合に変化が起これると思う。実際、物的環境は一人で生活してもあまり困らないというふうになってきている。紆余曲折はあるにしても、長期的に見れば、近代家族の中でなければ生活できない、不自由するという状態は解消されつつあるんじゃないか。そうすれば近代家族を営むかどうかは、選択の対象なるわけだから、それに伴う規範・性別分業に必然性はなくなってしまう。例えば、女性が「料理を作る」と

な問題、めいめいの嗜好の問題になってしまった。

○市場とジェンダーの変質

いま言った「生殖が社会に占める位置」というのは長い目で見て言える話なのだが、もつと短い期間で考えると「市場の在り方」が性の社会的位置を変化させている。

現在、人間の再生産は近代家族と結婚という制度によって営まれているわけだが、最近の動きを見ると、そろそろ家族や結婚がすっかり非制度化されていく可

在と未来

橋爪大三郎

それは同時にひとりにされてしまうことで、どこかもろさをたたえている。倫の周りにはもうない。家族や結婚という時期に差し掛かりつつあるといわれている幻想の変容さえいわれている。人間関係に得ないはずだし、それ自体が社会の在る関係、とりわけ家族・結婚そして性別な社会的位置におかれ、どこへ行こうと

能性も考えた方がいい、という段階まできている。

近代家族は、どうやって生まれたか。それは社会が、人間を再生産するためのセクション（家族）と、物的な再生産のためのセクション（市場）とが完全に分離して、それらがお互いを前提にして別々に回転するようになることで生まれた。資本主義というのは社会のさまざまなプロセスを商品化していく運動なんだけど、市場にのせられない、商品化できないものがいくつかあって、性・人間の再生産などはそういうものだったわけ。イデオロギーの上から考えても、愛情とか性とかは経済的な対価を求めるものではなくて、それ自身が目的であって、無償である。だから尊い、と考えられた。そこで人間の再生産は、ずっと家庭の中で、女性によって担われてきた。この役割分担は、家庭と市場が分離する以前の伝統、例えば農村で行われていた男女の伝統的な分業の在り方を踏襲して再編成されたものである。フェミニストの言い方を借りれば、女性は労働力として市場に出ていく代わりに男性を市場に送り出

性愛の現

現代では、人は簡単にひとりになれる。でもある。人との関係は、感情だけが頼りや道徳で人を拘束する関係は、私たち関係も例外ではありえず、「再編成」のる。さらには、それに伴い、異性愛を巡る。在り方は社会の在り方と無縁では有り方かもしれない。そこで、現代における「性愛」に関わるものがどのよう

うになり、それまで人間にしかできなかったサーヴィスを代わって提供するようになるだろう。だとすれば、家事は機械がやればいいのか、家族がなければ生活を維持できないということは無くなるだろう。さらに進んで機械がもつ「人間らしく」なれば、それを性愛の対象にできるかもしれない。機械で性愛を疑似体験することが可能にもなるだろう。あるいは生殖技術がもつと進めば、胎児を母体の外で育てるのが当たり前になる。生殖に人間の肉体が占める比重は小さくなっていくはずだ。

かいう規範の必然性はどこにあるというのか。必然性がないのなら、規範を拒否したってかまわない。現にそういう動きはどんどん起こっている。社会もそれに耐えられるようになりつつあると思うね。

○技術革新と性愛の未来

二一世紀には、生命科学・人工知能が技術革新の柱になっていくと思うんだけど、これらのものが性の在り方を変えていくのは当然のことだと思う。例えば人工知能の技術が発達してくると、機械が人間の言葉を「理解」して反応できるよう

個体を再生産するのに、男女がセックスするしかないからそれを制度化した。それが結婚だ。もしも個体を再生産する方法が他にもあれば、現在のような結婚や家族の形が制度として存在する根拠はなくなる。そうすれば、そうした制度はみんな選択の対象になるわけだから、今のままがいいと思う人がそうする、というだけの話になる。結婚や家族の位置づけが変わってくるのは当然のことだと思うね。さらには、生殖技術が、性別という制度の根拠を無くして、まったく恣意

的な区別にする可能性だってある。

だいたい、男はこうだ、女はこうだという社会的な区別は、どれほど必然的に見えても必然ではない。何を男らしい、女らしいと考えるかは社会によって全然違う。男女の違いは、かなりの部分レックテル効果というか、慣習として我々が受けてくるものにすぎない。ただ「子供を産むか、否か」という区別だけが性別の最終的な根拠になっている。性別の判定は、どの社会でも伝統的に、外性器の形状を手掛かりにしておこなわれるわけだが、そこで判定されているのは将来の出産の可能性の有無なんだ。だから、出産が肉体に制約されなくなれば、そういった区別は意味がなくなつて、男女の性別は一切の根拠を失ってしまうと考えるのが正しい。もちろん、自分が何者で相手は何者か考える上で性別というのは、ものすごく根深い事実である。精神症状が進んで自我が解体していくケースでも、性別の自己意識は最後まで解体されない。だから過渡的には、技術の進歩があつても、性別は解体されず、自分が男であるか女であるかをめいめい選択する、とい

は、三万年前からちつとも変わっていない。これはハードウェアの問題ではないから、ソフトウェアないし情報の問題である。

情報が限られていて誰もが同じように発想している場合は、今ある秩序、今ある自分の姿以外のものを考えられないから自由という発想は出てこない。自由というのは、今の自分の在り方を相対化して、自分の他の可能性つてもが見えてきた時に、自分から奪われたその可能性を取り戻そうとするエネルギーに基づいている。だから、情報が流布して知識が増えれば増えるほど、人間は自由になっていくという命題をたてることができる。もしも、歴史という形で過去の知識・情報が蓄積されるとするなら、時間が経てば経つほど、人間は自由を欲するようになる。これは不可逆の過程だ、と言えるんじゃないか。

ただし自由を欲するだけでは「自由」にはなれない。自由というのは、単独で成り立つものでなく、例えば市場なり議会なり投票なり、人々が勝手に自分の選択をして全体としてうまくいくという

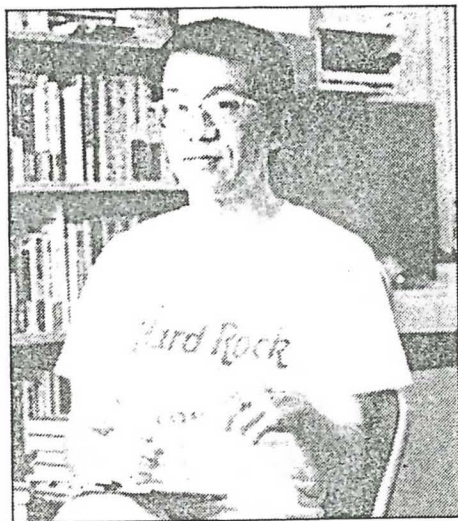
う期間がある程度続くだろう。ただし、最終的には、人類から性別がなくなり性別以外のアイデンティティの存在が可能になることも考えておいたほうがよさうだ。

「市場の在り方」や「技術の進展」で将来は、個々人の性に関わる選択の余地が、好むと好まざるとに関わらず、かなり広がると思う。そうすると、選択に対してどういう必然を対置するかが、大きな問題になってくるだろう。

性の領域についてというのは基本的に、大昔

橋爪大三郎（はしづめ・だいざぶろう）

1948年生れ。東京大学卒。東京工業大学助教授。著書に、『言語ゲームと社会理論—ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン』、『仏教の言語戦略』（ともに勁草書房）、『はじめての構造主義』（講談社）など多数。



制度的保証がなきゃ駄目なわけ。あるいは、自由というのは、もしかしたら、ひとり一人の選択の帰結を吸収する構造を必要とするのかもしれない。アメリカならアメリカという国が自由であるためには、その外側に自由の反作用を吸収する構造があつて、例えばそれは自然環境とかインディアンみたいな伝統社会、貿易相手の第三世界だったりするのも知れない。

こう言うと、自由をネガティブなものにとらえているように思われるかもしれない。でも自由を上回る価値を人間はま

から今まで二つの矛盾する論理が組みあわさってきたわけだ。ひとつは選択、もうひとつは必然。必然というのは選択の範囲を限定すること。例えばインセンスト・タブーとかがそう。選択があるからこそ必然が存在するのであって、その両方が折り重なって秩序を形成する。この選択と必然の関係は大昔から変わらない。ただ、どういうところに、誰の選択をどれだけ認めるかが、時代とともに変わっていくわけ。我々の時代は、個人の選択を最大限に尊重しようという方向でやっているわけだけど、選択の要素にどういう必然の要素をもってくるかということが非常に立ち遅れている。今でさえそうなのだから、将来はもっと問題になるはずだ。

○自由は必然か

ただ、人間が自由を欲するのは、話に性に限らなくても、当然の流れじゃないか、と思う。

なんで我々は、個人の選択なり自由をどんなに信じるようになったのか。人間の脳の生理的なメカニズムについての

だ発明していないと思う。もっとも、これから発明しないとは言えない。もしも自由が良くない帰結を生み、歴史的に限界のある思想だということが明らかになれば、当然それを取り越えていかなければならなくなる。それはどういうふうにしたらできるかと言うと、自由の根拠であつた情報を充分踏まえ、より価値相対的な方向に進むのでないと無理だろう。偏った情報の上で「これが伝統的に正しいんだ」と言っても、そこへ新しい情報を持ち込まれれば、そんなものは覆されてしまう。やはり今のところ自由を上回る考えというものは無いと思う。それは人間が自分で自分を決定するという根源的な条件なのだから。

ただし自由というものには内容がない。だから、制約を逃れる、つまり自分が選択していないのに受けとってしまったさまざまなものから逃れた後で、こんどは自分が何者であるかを探す努力をしなれば、自由は無内容なままである。逃げる時は共闘できるけど、帰り道はひとり一人違うんだから。

ANNOTATION



⑤ 武力
少数者が多数者に言うことを聞かせる
装置は、かつて「武力」しかなかった。現在
は「情報」が、その代わりになる。情報
をどう操作し、どういう現実を作りあげ
るかによって、推力の力は人々新しい
かたちになっている。だから、メディア
が発達すれば、推力は高度化する。
テレビは、ラジオより音声力だけの、
メディアに比べて、情報量が格段に多い。
最近の情報は情報も広まっている。管理し
にくくなっている。ラジオがファシズム
を産み出し、テレビはポストロイカを
産み出した。
⑥ 資源の動員力
伝統的に日本では、武力を動かす場合、
天皇(帝)の命を尊ぶことになっていた。
それを縁の故郷に、武力範囲が決定
する。戦国時代の藩から、防人を召集す
るのも天皇、税を課するのも天皇。この
イメージの延長上、大日本帝国の軍閥が
形成された。
⑦ 国主日本
その辺、日本の(軍事勢力)には、アメリ
カに対する、心理的なコンプレックスが
ある。自分と戦争を終わらせることも、
最後世界を救うことも、何ひとつできな
かったという負い目。戦後体制の断りか
たぬ部分は、気がついたら全部出来か
つていた。
⑧ このコンプレックスは、中国に対する伝
統的なコンプレックスと通じる。日本
は、手に入らない情報は、何でも手に入
りやすくなる。けれども、自分からなくな
って、世界を動かしている(までの)状態がな
い。このコンプレックスが裏切り固まった
場合、極端な精神主義が生まれる。
⑨ 国父大正三
はじまり、たいさうさう。1948年神奈
川県生まれ。東京大学文学部社会科学科
学。東京大学社会学部社会学系社会学科
学専攻博士課程修了。現在、東京工業大
学助教。女性・賃金、権力を批判原理と
する「配分空間論」の構想を原稿中。
著書に『空間ゲームと社会理論』グー
テンシュタイン・ハート・リーマン。『仏
教の官僚政治』はじめての佛教学。主
義としての社会科学。現代思想。主
何を考えればよいのかなど。

CROSS REFERENCE

日本の学力
日本の学力向上は学習能力モデル
になっている。品川 三郎氏
(p.164)

彼をとても尊敬したのが、昭和天皇です。

昭和天皇は、戦前・戦後を通じて天皇の地位にあった、希有な天皇です。戦前は大日本帝国の主権者。戦後は民主日本の象徴。結果的に彼は、日本人のアイデンティティの連続性を体現する存在でした。戦勝国アメリカは天皇の戦争責任を追及しなかった。そのほうが、日本はうまく治まると思ったからです。現人(人)間でありかつ神である)なんて、欧米人の感覚でいうとキリストそのもの。こういうカリスマをそなえた人物をうっかり処刑して、その後何世代も、反米ナシヨナリズムに悩まされることになったら大変と、危惧したに違いない。

で、お互いを日本人と確認できるのです。天皇は、日本人に共通の前提を与えるための象徴的な仕かけになっている。

天皇には実体がありません。なにかとても伝統的な存在のような気がしますが、よく考えてみるとあべこべにロツバ文明が目前に現れると、今度はヨーロッパ指向になっていく。洋服を着た文明開化の天皇は、尊皇派の日本主義者を切捨てて、この前の戦争だってそうだ。反省の中心天皇は早速、民主主義に改宗する。要するに天皇は「いち早く改宗することによる権力」なのです。文明の中心地から少し離れたところにおり、つねに中心地と連絡をとっていて、その真似をして國の方針を作っていく権力。

だから天皇は、厳密な意味での「権力者」でありえない。権力者が必要とする共通了解を日本人に与え、信じこませるためのメデヤ。それが天皇なのである。

天皇が近代日本の発展をリードすることができたのは、資源の動員力があつたからでしょう。たとえば天皇の名において、人的資源（兵隊）を動員することができた。古代から召集権は天皇にあつたのです。山川草木、国内の資源のすべてに対する潜在主権を持つているとも考えられる。幕府に集まつていた武士たちは、刀を捨てて産業戦士になりましたが、明治天皇はその上に立つ、資本家たちのリーダーに変身した。そんな彼をとても尊敬したのが、昭和天皇です。

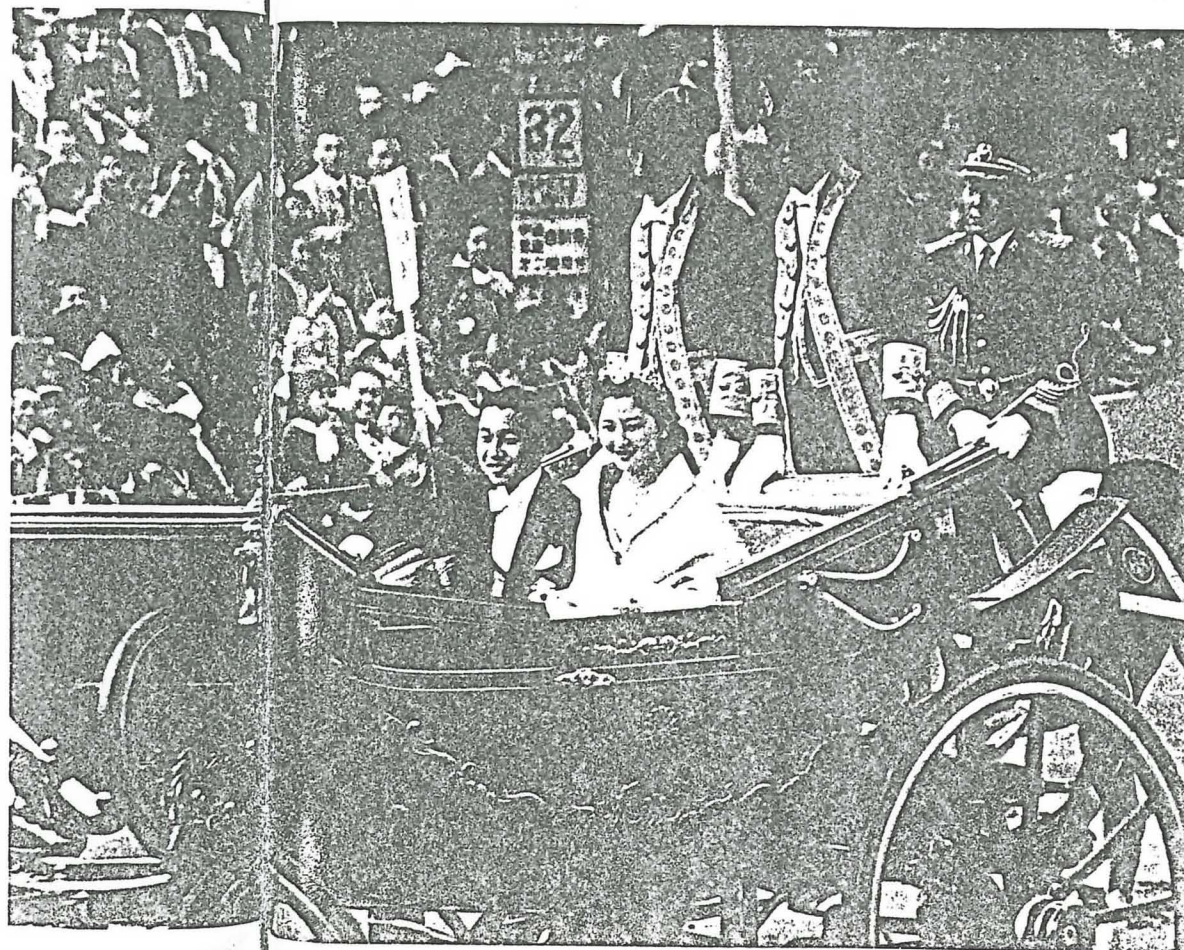
変化しても変わらない原素があるんだ、というアイデンティティ確認の手段にますます限定されていくはず。これを、文化的な模範としての天皇、と考えてもいい。かつてのミッチーチームは、恋愛結婚に市民権を与えるうえで、大きな力を持った。天皇が関心の対象でありつつけるのは、われわれがそこに模範を見ようとするからです。

天皇の歴史を見て思うのは、いかに日本人がやるべきものを持たず、外国からの情報や他国の文化に翻弄されるか、ということ。なにか日本に固有のものがあるのではないかと、伝統を探ろうとするのが、そもそも間違いない。むしろ振り返っても、何もないと悟るべきでしょう。そのうえで、まず自分自身のなかから、ここからの世界を生かすアイデアを探す。集団でアイデンティティを探さなくても、自分だけのものがあればいい。こういう思い切りが大切です。そこさえちゃんとしていれば、天皇のあり方はとりあえず今のままで、差し支えないのではないかな。

談井橋爪大三郎(社会学者)／構成井泉岡誠(編集者)

がついている。そして、その関係を解説する機能を、最終的に天皇が握っているんです。

日本の権力者が、何かというと天皇を擁立したがるのは、自分たちが日本人だということとを認めるような儀式のことである。日本人はみな神から生まれたことになっていますが、天皇はその神の直系の子孫。天皇という共通項を通じて、日本人は神とつながることが出来ます。日本人は、天皇を共に戴くこと



こまでも遡れて、とってもアルカイック（原始的）な段階にまで連続しているんですね。こういう権力は、世界で類例がない。天皇の本質は何かといえんば、祭司です。古代宗教によくあるシャーマンみたいなもので、穀物再生産の儀式を司るのが、天皇家の特権で、大嘗祭や新嘗祭みたいな重要な儀礼もみんなそのたぐいです。これが変質に変質を重ねて、いまの象徴天皇制にたどりついた。武士が天皇を戴くようになったのも、そうした変質のひとつです。農耕民は土地争いの果てに、武力を持つようになり、武士団を形成しました。この支配地域が、関東から日本全体に拡大していく。そして、幕府政権を作り、800年近く日本を支配したのですが、天皇はそこでもうまく生き残っていった。これはわりあい必然的なことだったと思うんです。古代の天皇政権は、古事記『日本書紀』を編纂する過程で、日本中の神々とうまく渡りをつけてしまいましたからね。武士のような新興勢力も、八幡とか氏神とかの宗教的シンボルを動員の手がかりにしようとする、既存のシンボル秩序と接点を探らざるをえない。日本の地域集団、血縁集団、職能集団、軍事集団、……にはみんな、それぞれ神

平成天皇が即位すると、日本は敗戦国の鬱屈から解放された。彼は、即位の礼で「日本国憲法を守る」と誓いました。昭和天皇は、日本国憲法の前提でしたが、これからは、憲法が平成天皇の前提になる。憲法の規定するとの円環関係が生まれました。

生き残っていった。

した変質のひとつです。

武士が天皇を戴くようになったのも、そう

なかにのかくしてす。これが變質に變質を重ねて、いまの象徴天皇制にたどりついた。

で、大嘗祭や新嘗祭みたいな重要な儀礼もみ

穀物再生産の儀式を司るのが、**天皇家の特権**

代宗教によくあるシャーマンみたいなもの。

天皇の本質は何かといえ、祭司です。古

始めの段階にまで連続しているんですね。

こまでも翹れて、とってもアルカイック（原

Fig. 1

D-TW
9914

「0」
年12

vol.
月30

1 Jan
日発

銀行

ary
No. 1

199
137

2 F
ユ

p. 80

6-87
ヒ-

—

2-

The Country of Gods

天皇とどういう権力が

「iD-TWO」 vol.1 Janurary 1992 pp.86-87

1991年12月30日発行 No. 137 ユー・ピー・ユー

社会の根本原理に挑む
社会学

社会全体をどのようにしたらうまく捉えられるか、という質問なのでしょけれど、そもそも社会学には、それは無理なんです。高校生は、ある学問をやれば、たとえば経済なら経済学をやれば経済のことをすべて

わかってしまう、と思うようですが、実際には経済学を学んだからといって経済のすべてがわかるわけではない。わからない問題はまだまだたくさん残っています。

しかし、本来はそれをするのが社会科学であり、そして社会科学の中でそうした全体性に一番近いところにあるのが社会学

だと言ってもいい、と私は考えています。というのは、社会学は、社会の成り立ちに関わる根本原理を探ろうとする学問だからです。経済学のようにお金という媒介を通したり、政治学のように選挙などを通したりして、語れるものとは違って、そういうものでは見えてこないようなものを対象にしているからです。

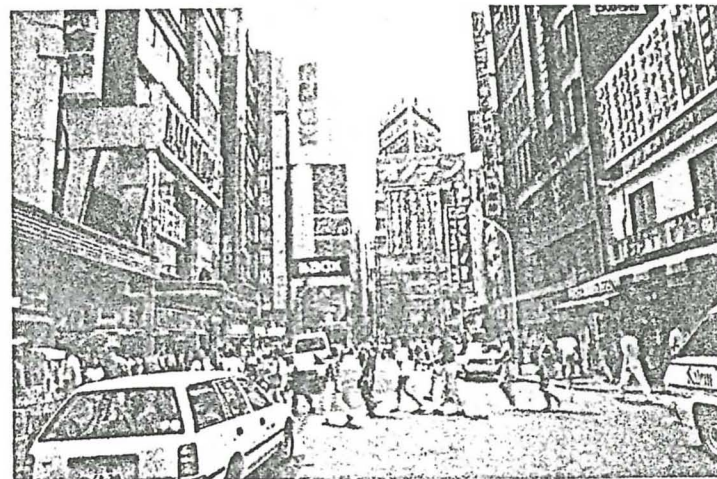
学問は対象と方法が一緒になって発展
つまり直接的な言葉でいえば、生身の人間と人間が直接出会って社会ができていく、そういう部分に、一番のポイントを置いているのです。
ではどうしてそのような役割分担が起きしまうのかと言え

政治・経済・教育…社会的諸制度再編の中で

[社会科学の全貌と社会学]

社会をどうつかむか!

貨幣媒介の経済学と「人と人との出会い」から始まる社会学



「人と人が出会うことから社会は生まれた。人はどうして社会を作ったのか？」

社会についての学問というと、手取り早くは、社会科学系の諸ジャンルとなろう。中でも、経済学は、その理論に汎用性と統一性をもつ。また社会学は、原初的な社会のあり方に目を向けるという意味で、求心的だ。しかし、どちらにも、長所はあると同時に、欠点もある。ここでは、「現代思想はいま何を考えればよいのか」冒険としての社会科学」といった社会、現代、社会科学全般に関わる著書を持つ社会学者橋爪大三郎先生に、社会科学の全体とそその社会を捉えるための学問として経済学と社会学のそれぞれの有効性について語って頂いた。

東京工業大学助教授(人文社会群)

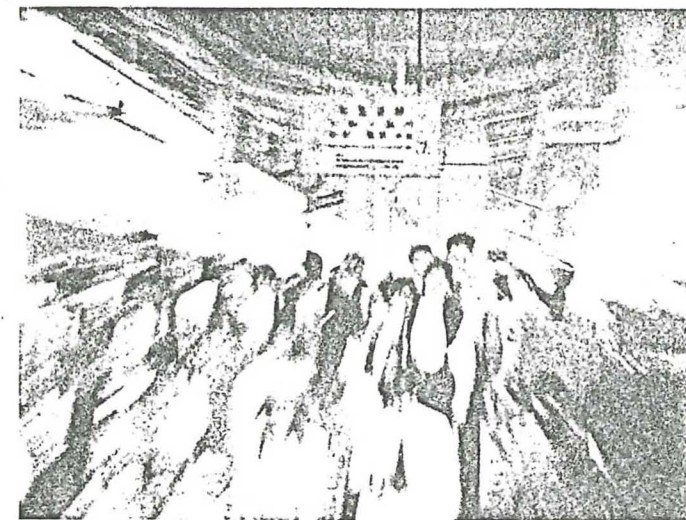
橋爪大三郎先生

the trend of academism

学問の先端を探る

8

変わる環境下の人間を捉える 社会のしくみと現代



21世紀まで、あと残り10年もない。この10年、おそらく、世界は、日本は、そして、そんな環境とそこに生きる人間との関係は、急速に変わっていくに違いあるまい。自然環境問題、民族問題、広がる南北間格差、国際化・情報化・ハイテク化に併う生活環境の急激なる変容……。しかし、現在、社会を捉える手法は、対象により区切られているため、まるごと1つの社会を学ぶことはできにくい状況にある。ここでは、そうはいいながらも、これまでの学問的手法の流れを踏まえ、より広範な社会の現象へのアプローチをしていくには、どうすればいいかを、考えてみたい。

政治・経済・教育…社会的諸制度再編の中で

東京工業大学 橋爪大三郎助教授 社会科学の全貌と社会学

現代を問う研究者たち

近代化論、構造論、システム、階層論/アイデンティティ、コミュニケーション論/政治/経済・産業/国際化・異文化・宗教/情報化/高齢化/女性・家族/教育/都市化・地域/ポップカルチャー(建築・デザイン)/メディアが生んだもう一つの「都市」東京大学 吉見俊哉助教授 80/ブックガイド 82/現場の研究者からのメッセージ 86

充実の大学

大学ランキング 88/論文数 89/大学の特徴 90

67

72

88

15/16

▼文化人類学的手法は案外易しい。



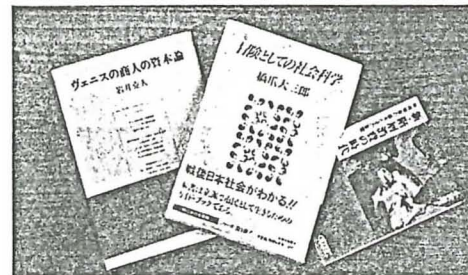
もうひとつ、社会科学には有力な方法論があります。それは、自分たちの社会以外の未開社会を対象とすることで出来上がった人類学です。実はこれは結構生産性が高いんです。というのは、そこには、研究者自身が立派な文化人ではなくても手軽に使えるような、マニュアル化された調査法が出来上がっているためです。それは機能主義というもののんですけど、親族を調

文化人類学は、二一三年で論文は書ける

政治学者はそこまではなかなか研究しようと思いません。そこはむしろ社会学に下駄を預けるという形になっています。

「金の原理」は抽象化しやすいので経済学は発展
そういう棲み分けみたいなところで、どういう方法が一番有効だったかと言えば、それは経済学でした。お金というのは現代社会のすべての側面で機能しており、しかも、お金が動いているとはどういうことかは、誰もがとりあえずは理解できることです。その上それは非常に抽象化しやすい訳です。そうであるのに、そのお金で動いている社会の仕組みは複雑です。だから、非常に広い範囲のことを語れるわけです。このように経済学は、対象に密着し、そしてそれにふさわしい数学という方法を持つことで、著しく進歩しました。したがって、それを学ぶことは、非常に有効なわけです。しかし欠陥もあります。それは、非常に単純な人間のモデルを想定した上に成り立っているということです。さらに、学問的な進歩が著しいため、精緻な体系をどう作るかということに多くの研究者の関心が向きすぎているくらいもあります。そこで使う数学は、極度に高度なも

▼岩井克人氏(経済)は資本主義の原点を問い、小沢雅子氏(経済)は今の日本を語り、橋爪氏(社会)は戦後日本を問う。



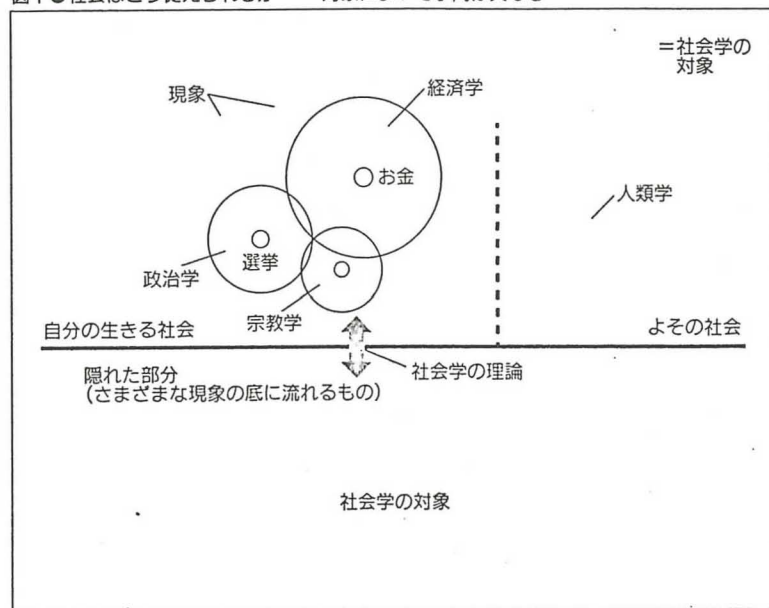
のようになってしまっていて、誰でも理解できるという状況ではなくなりつつあります。これは、お金という世界共通の対象をもとに、同一の学問を構築するため、世界中の研究者たちが互いに競い合ったからなんです。そして、このように学問自体が成熟していったために、経済学という枠組みが非常に強固なものとなって、学者の自由があまり効かなくなっています。たとえば市場原理の根拠を支えているような構造、資本主義の本質的な構造などには彼らはあまり目を向けません。そういうところは難しいので成果を出しにくいですし、加えて、そん

なところに関わっていると、高度な数学にも追いつけなくなってしまうですね。
経済学は枠組厳しく、根本研究もなかなかできない
しかし経済学者の中にも、そういう資本主義の底流に流れる裏の構造みたいなものを語ろうとする人がいないわけではありせん。たとえばマクロ経済学を作ったケインズの凄さは、まさにそこにあつたといえます。例を挙げるなら、賃金の下方硬直性といわれているものがありま(注1)。そこには当時の労働組合のあり方やイギリスの社会慣行などに対する深い洞察があつて、これなど実は、社会学者の仕事なわけなんですよね。日本においても森嶋通夫さんなどは、近代経済学もマルクスの経済学も両方できる人で、比較的シンプルな道具立てでこれまでの学説を整理するような仕事をしています。いわばそこでは経済学を越えた社会科学全体に関わるような仕事をしている。しかし、社会の本質的なものを見てとれるような人は、一般的にはひどく優秀な人で、ほんの

一部の人にしかすぎないのですよ。だいたいそういう人は、若いうちにアメリカへ留学して論文を四〜五本書いて、できるだけ短期間でP・H・Dをとって帰国する、といったパターンの人訳です。京都大の青木昌彦さんとか、東京大の岩井克人さんとか市場経済の底流を流れる原理についての仕事もしていますが、共にそういう経歴です。とにかく、経済学の場合、簡単な数学でもしろいことを言っても、立派な業績を取めた人ではないとなかなか信用されない。そもそも経済学というのは明快な世界で、研究者のランキングなどというものも簡単に、出ま上がつていきます。初期の人で言えば、最初に言つた森嶋さん、それから稲田献一さん、次に二階堂剛包さん、村上泰亮さん、宇沢弘文さん、そして根岸隆さんといった具合にです。さらに、研究分野にもランクがあつて、財政など応用経済学よりも「理論」が一番偉いことになっている。だから、経済学の枠にすっぽりはまつてしまうと、生き生きとした関心で具体的な社会の現実に向かつていく

のは、なかなか大変なのです。
政治学では、選挙からみえる社会を捉える
それでは政治学はどうかと言うと、経済学の市場にあたる中心的テーマは、政治学では選挙になります。しかしこの選挙における投票行動というのは、中心的テーマでありながら、結局はその日の気分や天候などに左右される非合理的なもので経済的研究に頼らざるを得ず、経済学でやっているほどの抽象化はとうていできないわけです。考えてみればわかると思うのですが、国家の体制によっても、状況は全然変わってきてしまいますよね。それに選挙に大きな意味があるのは一部先進国だけで、その中でもソ連や中国ではあまり意味は持ちません。だから政治学が国際化するのは困難ですし、さらに一國の中でも、幾つかの派閥に分かれてしまふところがあるんですね。だから、抽象化できないという点では社会学に近いです。しかし政治的人間行動の裏に流れているものを研究しても、簡単に研究成果が出てこないの

図1 ●社会はどう促えられるか——対象によって学問は異なる——



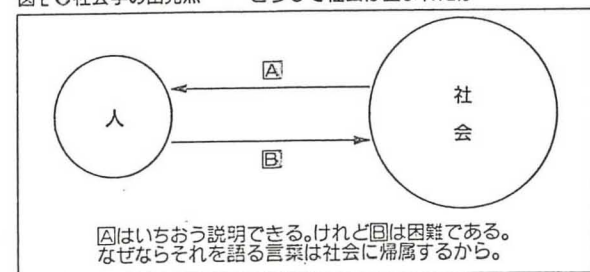
べたり、プレゼントの交換方法を調べるときに使われます。だからきちんとトレーニングを受けた人間なら、二〜三年現地調査すれば必ず論文は書ける、そういう学問なんです。文化人類学というと普通モースとかレヴィストロースとかをイメージするかもしれませんが、彼らは小説とかエッセーに近い感じ

社会学は、そもそも、言葉に境界も……
一たまこが先かにわたりが先か
では肝心の社会学ですが、社会学はかわいそうなことに、いま言った諸学問に、目につきや

で書いていて、決してこの学問の主流というわけではないんです。

すくおもしろいところをみんな持っていないでしまった。でも、残りの部分にもまだまだおもしろいところはたくさん残っています。さらに、そこにはかなり本質的なテーマがたくさん潜んでいるのです。
人と人とが素朴に出会う。そういう場面にかかわる現象は、考えればたくさんあるわけですから。対象という意味で言えば、集団とか組織・階層・都市・農村・犯罪などといった問題があります。また、そこからより突っ込んだところには、個人の行動の原理なり集団誕生の理由なりを浮かび上がらせるというテーマもあります。けれどそういった人間や社会の存在原理にかかわるような突っ込んだ研究は非常に難しい。なぜなら人間は、実は、社会のない状態など知らないからどうしても人間を社会内存在と考えてしまうからです。でも実は、社会は、人間の自由な行動の結果できたものかもしれない。まず人間があつて、次に社会ができたのかもしれないのですよ。ところがそれは、我々が使っている言葉では説明できない。それらは、どれも集団の

図2 ●社会学の出発点——どうして社会は生まれたか——



以上のような論点に関しては、パースンズという人が、学説史上非常に大きな位置を占めています。彼は、社会と無関係

社会学者
パースンズの試み

中で、意味役割が決まり、流通している言葉ばかりですから。つまりすでに秩序ある世界の言葉で、秩序がどういふ風にできたかは語れない。だからすぐに「社会化」、つまり、教育学の議論のようになってしまふんです(注2)。

1991-7

16/16

表4 ●経済学・社会学の長所・短所

	経済学	社会学
対象(素材) 思想	お金(市場) Ⅱ 汎用性の高い人間の行動原理に限定	人と人との出会い(全体) Ⅱ 多様な原理で人は動くと考え
記述の仕方 と 理論構築	数学という言葉を用い、 体系的な理論構築	固有な言語はもたず、 対象も限定的でないため理論としての抽象性は低い
特色	非常に学問的生産性は高く、また他学問への波及もある。 しかし、学問として成熟してしまっているため、研究の自由度は低く、また新たなアイデアが出てくる可能性は低い	学問的生産性は低いものの、変動期に社会がある場合効力を発揮する。 加えて、成熟度が低いいため、自由度はあり、また、1つのアイデアが画期的に学問を進歩させる場合もある。

きた株式の持ち合い制度や、競争入札の時の談合などといった業界の暗黙の制度など。さらに外国人労働者の問題に絡む出入国管理法、そのほか土地の税制や食糧法、農地法など。また上級公務員試験も、今のように各省庁がばらばらに採用して結局省庁間の縄張り争いのもとになるというやり方をこのままにしておいて良いのか、という問題があります。

実は必ずしも日本が当事者として作りあげたものではない。それが今、ようやく崩れようとしている。そういう時、社会学は効力を発揮するんです。というのも社会学は一貫して制度の外目の目を持っているためです。だから、制度の中の問題点が見えるため、そこに生きる大多数の人びとに、それを気づかせることができる。新たに、日本の社会を構築していかなければならない今、社会学を学ぶ人間は量的にも質的にも飛躍的にパワーアップすることが求められているんです。

(注1) イギリスは労働組合が強いのが特色である。したがって、一度賃金が上がると会社の経営が悪くなると労働者はすぐストライキなどする手だてをもっているため、賃金は下げられなくなってしまう。するとそこでは労働市場が成立しなくなり、経営者は会社が潰れるのを覚悟で高い賃金を払わねばならなくなってしまう。サッチャーはここにイギリス病の根本があると考え、労働組合潰しを行ったのである。

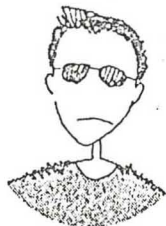
(注2) 物理的に存在する人間、例えば私とあなた。しかし、私が「あなた」と呼んだ瞬間、あなたは物理的な存在としてのあなたではなく、社会関係の一員になってしまうのだ。我々が使っている「ことば」を使う以上、こういった原理的な制約から自由になれる。というのは、ことばは、社会関係の中で、その意味の体系ができてあがっているからである。

(注3) パーソナリズム以降、社会の一部分に焦点を当てたミクロな研究が大きな流れとなった。もっ

と厳密に個人の経験に立脚して、いこうとする現象学的社会学、人類学の流れを汲んで人間と人間が操る関係でどう出会うか観察しようというエスノメソッド、人々との間の行為をもつと広くシンボルとして捉え、社会の成り立ちを象徴的なつながりとして考えようというシンボリックインタラクショニズムなどがある。

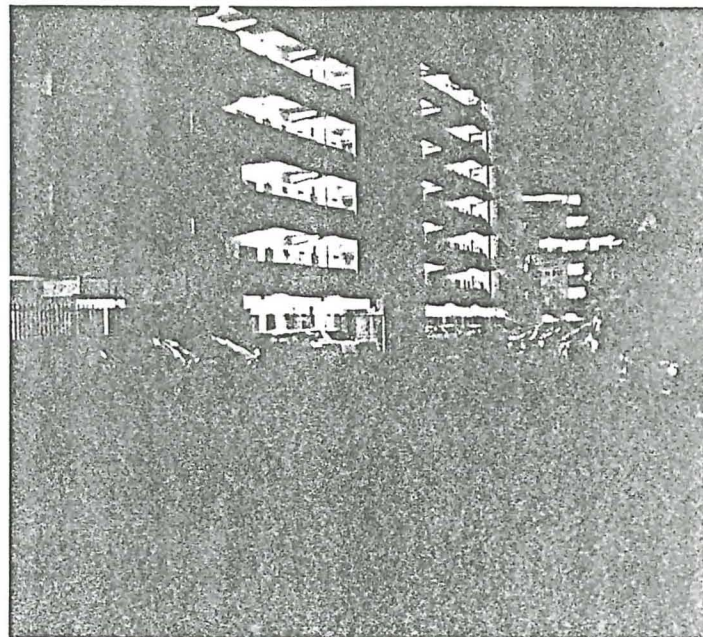
しかし社会をマクロな、より広い視野で捉えようとするものにも新たな潮流が生まれた。構造主義の流れを汲むものであるとか、パーソナリズムの流れを汲むルーマンの「意味のシステム論」などだ。ルーマンはパーソナリズムのシステム論が社会と個人のつながり方を機械的にとらえているとし、人間も社会も意味のシステムととらえるべきだと、熱統計力学や新しい数学からのアナロジー(類推)をつかって、議論を進めて行った。

政治学や経済学など、すでに確立した学問に対抗しようとするれば、こういう努力をせざるを得なかったのだ。



はしづめ・だいさぶろう
昭和23年神奈川県生まれ。開成高校卒、東京大学文学部社会学科、同大学院博士課程(社会学)終了。以後、無所属で、執筆に専念。平成11年から、現職、専門書執筆(仏教の言教戦略)。(勤草書房)などとしての評価のみならず、一般書を通して、社会学、現代思想をやさしく、語るのでも知られる。「はじめての構造主義」(講談社)、「現代思想はいま何を考えればよいのか」(勁草書房)「冒険としての社会学」(朝日新聞社)など。

▼変容する現代人の住環境も一つの研究対象だ。



に存在する人間から出発して、社会秩序を説明し、そういう視点から社会の基礎理論をつくらうとした。彼は、秩序のない、個人個人がバラバラに存在する状態から社会が生まれる、その過程を理論化しようとし、また、そうして出来上がるシステムの中に、政治学や経済学も位置づけようと考えたんです。が、しかしそこでは、まず人間がいて次に社会ができたのか、社会が

あったからこそ人間になれたのか、という議論がごっちゃになってしまった。
だからパーソナリズムは、ラディカル派やヒッピーの人達から俺たちはあんたが考えているような、社会システムの一部なんかじゃない、という批判もされしました。そして、パーソナリズム以後は、実にさまざまな研究方法が考えられていったのです(注3)。

対象派の仕事はジャーナリズムと同じ
社会学の今言ったような視点は、なかなか難しいけれど、実はとても面白いところでもあります。これまでの形式ではもはや説明しきれない社会と個人の関係を、どうやって説明していくのか、論理的突破口を開くにはどんな道具立てを用意したら良いのか、僕なんかはそれを今悩んでいるところです。
しかしこういった理論派は、社会学者全体から見れば十分の一ほどだということは知っておく必要があります。社会学者の大半は、対象にシンパシー(共感)をもつ人、方法にシンパシーを持つ人達だからです。
具体的にはどんな仕事をして

いるのでしょうか。対象にシンパシーを持つ立場などは、実は調査型のジャーナリズムの仕事とそうは変わりません。例えば、立花隆さんの田中角栄の金脈の研究や脳死のルポルタージュなどは非常に優れていますし、猪瀬直樹さんの「ミカドの肖像」なども悪くありません。それからパーナードのようにずっと

社会学は現在のところ、経済学ほど応用性のある理論をもっていない。しかし、成熟していないし取り残されてきたから、課題は考えればたくさんあると思いますし、もし、誰かがいいアイデアを出せば、飛躍的進歩も可能です。だからその意味で、とてもおもしろい。さらに大事なことは社会学にはいま、特定

経営をやってきた人が「組織論」を退職前に書いたり、城山三郎のような作家が書いたものの方が、社会学者が書いたものよりずっと面白かったりします。学者には、それを職業にしてしまったがゆえにかえって現実社会の感覚が鈍るという限界があったりするんですね。
けれどもこういうことは、超一流のジャーナリストとふつうの学者と比べるから言えるだけで、長年一つのテーマにこだわっている学者でなければ絶対に見えないものもある。だからふつうのジャーナリストに比べたら、やっぱり学者の方がよくやっています。

の支配的な理論がないため、単純な一つの物の見方を押しつけられず、絶えず広い視野でのを見られる。しかし、経済学などは、非常に単純なモデルから出発している。だから、広く人間や社会を学ぶための入口の学問としては、社会学はうってつけだと思えますよ。結局、社会全部をみるには政治・経済も学ばなければならぬが、その前にまず生の情報に触れる。とするならば、やはり社会学です。だいたい社会の集団や組織でも、ある一定の割合でそういう社会学を学んだ人が必要なんです。そういう人がいないと、世の中うまいかない。経済学や経営学を学んだ人ばかりじゃ駄目なんです。問題発見能力や、人間に関する感受性では、やはり社会学に適わないはずですから。